

酪農・苦境の源

栃木県は生乳生産量が北海道に次ぐ国内第2位。酪農が盛んです。その酪農で、存続を脅かす事態が進行していきます。

(栃木県・高橋誠)

栃木に見る

アベノミクスによる円安で輸入飼料が高騰し、多くの酪農家が経営に苦しんでいます。

大田原市で酪農を営む花塚尚(たかし)さん(82)も「飼料の値上がりはあまりに大きい。生乳の価格も上がりましたが、まったく追いついていません」と語ります。

アベノミクスの上昇に合わせるならびに製品メーカーに納める生乳の価格を一時あたた20円上げなければ追付かないのに、生乳がタフついでいるために10円しか上がらなかつたとれます。

「大本はアベノミクス。花塚さんの言葉の意味は円安=飼料高騰という単純なものではありませんでした。

バター不足

花塚さんの生息

国的なユーズとなりました。生乳が足りないと困われ、多くの酪農家が借金をして乳牛を増やしました。「そもそも、牛牛を増やすと面でも乳を出すまで育つには24ヶ月かかる。それなりに『どんどん金を貸すから、どんどん牛を増やせ』と説教された。アベ

クローズアップ

アベノミクスは、もともと大企業ほど大きな頭金で輸入飼料の購入をした方法で酪農家は利用された」と花塚さん。しかも不足を補うために増やした乳製品の輸入量は、だに変わらず、いません。「アベノミクスに累せられた酪農家ほど大変な頭金でつづる」と語ります。

進む工業化

農業はいま、工業化に向かっています。

かつては多いの農家が目前で養鶏、養豚をまかなっていました。アベノミクスがもたらしてくる異常な資金供給は、農業とは関係のない企業の参入まで呼び込んで、「メガファーム」と言われる大規模化を拍車をかけています。飼育の大規模化は、自給飼料で賄いきれず、輸入飼料に頼らざるを得ない状況を招いています。耕作でも大規模化がすんでいます。耕作放棄され

「危機の大本はアベノミクスだ」と話す花塚さん

た土地を企業が借り受け、大型機械を入れています。農業とは自分の労働力をつき込んで儲むものと考えている花塚さんは、農業の工業化に違和感があると思います。

「農業は体を使い、健康を保つことにもなるすごい活動。国がすすめているメガファームは、本来の農業とは異なる勤め人のシステムに見える」

地方弱体化

日本は農産物の輸入を拡大し続け、農業危機は以前から叫ばれてきました。農業危機は過疎化など地方の弱体化も招いています。

花塚さんも「農産物の輸入を止め、農業が成り立つようにすれば地域が活性化する。循環社会を維持できるはずだ」と言います。しかし農産物輸入が減る兆しはありません。外国との関係で需要と供給のバランスを崩しておきながら、政府はその解消を国内の農家に押し付けてきました。

そこへ加わったアベノミクスは、農業の在り方まで変えてしまおうとしています。

「行き過ぎだと反省する大規模化を拍車をかけています。耕作の大規模化は、自給飼料で賄いきれず、輸入飼料に頼らざるを得ない状況を招いています。耕作でも大規模化がすんでいます。耕作放棄され